

江東の樹木 ③

砂村の開発と元八幡の松と桜

江東区深川江戸資料館

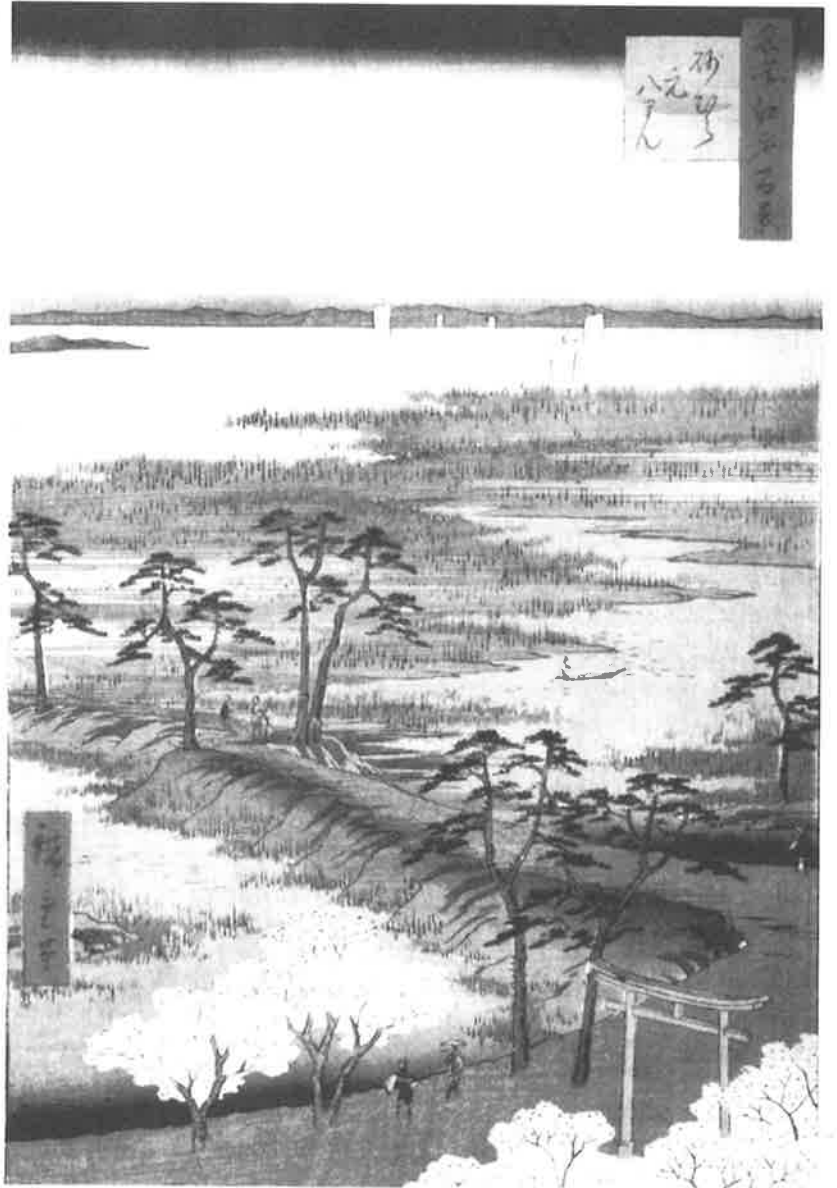
砂村新左衛門一族の砂村開発

西は横十間川から東は中川まで、北は境川（現清洲橋通り）から南は海岸までと広大な地域、現在の南砂のほぼ全域と東砂の一部（7・8丁目）は、江戸時代に開発された「砂村新田」と呼ばれるところです。この広大な地域の開発は、区内の新田開発の中では最大の規模で、地名としても、明治・大正まで使われていました。

この地域の開発は古く、「万治2年（1659）相模国（神奈川県）三浦郡から砂村新四郎が来て、原野や海岸の寄洲を切り開いて新田開発をした。村名は、開拓者の苗字をとって付けられた。」（口語訳・『新編武蔵風土記稿』）と伝えられています。

この開発に携わった砂村新四郎の父は新左衛門といい、出身地は、摂津国（大阪府）上福岡（『新編相模国風土記稿』）、また、越前砂畑村（現福井県鯖江市）（砂村家菩提寺「正業寺」史料）とする説があります。そして、相模国（神奈川県）三浦郡久里浜の内川新田（現横須賀市）や、野毛新田（現横浜市）の開発を手掛けた人物です。砂村家は、近世初期の相模国における有力な開拓者でした。

砂村新左衛門は、寛文7年（1667）に没しますが、生前に「家訓」を書き残しました。寛文5年（1665）に書かれた「家訓」は21か条からなり、翌6年に12か条が追加され、合計「33か条」が子孫へ残されました。この第2条に「宝六嶋海辺（砂村新田）」のことが書かれており、その中で、「万物の種を集め蒔き、草木を植えれば森林にもなる。そうなれば、枝は薪として利用することもできる。また、開発地の風をしのぐ事もでき、大変重宝な用木になる」と説いています。新左衛門は、開発を手がけた土地の堤に松を植樹し補強することを、「家訓」の末尾に右のように記しています。



歌川広重「砂むら元八まん」（名所江戸百景）

江東区教育委員会蔵

三ヶ所松合六万六千本也	一 同三万本ハ	一 同六千本ハ	一 松三万本ハ	免
	新堤之足植置候	宝六嶋新島	野毛新田	
			新堤之足植置候	
			三浦新田	



富岡八幡宮（南砂7）

その後、砂村新田の南岸は、「松平阿波守様御下屋敷境より武州葛飾郡西葛西領砂村新田迄石垣扣（控）土手高壹丈四尺より壹丈八尺迄土手敷五間半より六間迄凡長千五百間餘海中え綾杭貳通り御打渡」（『御府内備考』・卷之百十六深川の六・入船町）、「汐除堤 東南の海岸にあり、元禄十一年波除のために公より築かれしものにして、今深川松平阿波守下屋敷邊より當村まで長凡千五百間に餘れり」（『新編武蔵風土記稿』・卷之二十五）の史料にあるように、元禄11年（1698）に、木場周辺から砂村新田までの海岸線約1,500間（約2.7 Km）に「汐除（波除）堤」が完成しました。この堤（石垣）の構築は、砂村新田の護岸とともに、後の材木置場（木場）造営にも関係したことでしょう。

そして、砂村地域は、砂地を利用した江戸における蔬菜（野菜・青物）類の中心的生産地として発展し、有名になりました。また、砂村に住んでいた百姓松本久四郎は、この地の野菜促成栽培を考案し広めた人物として知られています。

砂村元八幡の松と桜

砂村新田の鎮守として砂村元八幡（富岡八幡宮・南砂7丁目）があります。ここは、富岡八幡宮（富岡1丁目）の神体をはじめて勧請し、この地から深川に移転した旧地なので「元八幡」と呼ばれる、との言伝えのある八幡宮です（異説もあります）。

境内には、文化2年（1805）建立の芭蕉句碑「目にかかる雲やしばしの渡鳥」や、文政4年（1821）建立の五明橋石文句碑「ここにそ鳥居ありたき汐干道」が残っており、どちらも区の有形文化財となっています。また、社殿裏手には、天保4年（1833）に造られた富士塚が現存し、こちらも区の有形民俗文化財です。

歌川広重の「名所江戸百景 砂むら元八まん」



五明橋石文句碑

の浮世絵（表面）を見てみましょう。『新編武蔵風土記稿』に「社地は松樹茂り、前面は渺々（広々として果てしのない様子）たる海面にして景色殊に宜し」とあるように、江戸湾に続く広大な干潟・海と、土手には松が植えられ、参道（鳥居付近）の両側は桜が満開で、大変景色の良い所の様子が伺えます。

また、ここは桜の名所としても有名で、『江戸名所花暦』（文政10年・1827）に「砂村新田の東の海手なり。（中略）四、五か町が間、野道の左右へ桜を栽ふたり。南には海をひかえて、絶景の地なり」とあり、『東都歳事記』（天保9年・1838）には「重瓣桜」の景勝地として「砂村元八幡宮前 深川洲崎より十八丁程東にあり。」と紹介されています。

『江戸名所図会』、『東都歳事記』、『武江年表』などの編集・筆者で知られる神田雉子町（現千代田区神田美土代町・神田司町）の町名主齋藤月岑も、花見にここ元八幡へ出かけています。天保2年（1831）3月に訪れた時には「桜とる、桜づけにする」と日記に記しています。

このように、砂村元八幡は、堤防もでき桜の名所・景勝地として江戸庶民に知られるようになり、海岸伝いに訪れる人々が増え、江戸近郊の行楽地として親しまれました。



富岡八幡宮の富士塚